



権幸佳 著

『イメージと権力—高宗の肖像とイメージの政治学』（ドルベゲ、2015年）

권행가 지음 『이미지와 권력 — 고종의 초상과 이미지의 정치학』 (돌베개, 2015년)

著者の権幸佳は気鋭の美術史学者であり、これまでに「日帝時代郵便はがきにあらわれた妓生イメージ」「明成皇后と国母の表象」をはじめとする、近代以降の視覚文化と表象の問題を扱った論文を数多く発表してきた。堅固な研究姿勢と鋭利な分析眼において定評のある著者は、2007年、『棟方志功・崔榮林』展図録（青森県立美術館）に「崔榮林と珠壺会」を寄稿、2008年には、明治美術学会において「朝鮮名画の発見—呉鳳彬の朝鮮美術館主催古書画展」を発表するなど、日本においてもその存在は知られつつある。

本書は、著者の博士論文「高宗皇帝の肖像：近代的視覚媒体の流入と御真の変容」を加筆修正したものである。博士論文発表から実に十年の時を経て刊行されたものであるが、その間日本での研究活動も挟み資料を増補、満を持しての単行本化となった。

本書において著者は、欧米諸国と日本の国民国家形成とその帝国主義化を目の当たりにした朝鮮が、時代にどのように対応していったのか、その過程を王もしくは皇帝の「肖像」という素材を用いて、繊細な手つきで腑分けをしていく。

日本の皇室をめぐる表象研究は多木浩二や若桑みどりらによって先鞭がつけられ、後続の研究者らによっても相応の成果が出されているが、日本に関する研究が帝国主義の文脈において比較的平明に分析していくことが可能であるのに対し、朝鮮は列強諸国による圧迫と開港、富国強兵を目指した近代的国民国家への整備過程半ばに、諸国間の軋轢のなかで植民地へ転落していったという歴史背景があるため、イメージの位相もきわめて多層的である。このような多層性にたいして、著者は豊富な資料をもとに辛抱強く向き合っていく。本書の構成は以下のとおりである。

- 1章 隠された王の肖像
- 2章 象徴から再現へ
- 3章 朝鮮王の肖像、大衆に流布する
- 4章 皇帝となった高宗、イメージを政治に活用する
- 5章 日本に渡ったイメージの権力

教科書や歴史書でなじみ深い太祖李成桂の肖像画は、1872年（高宗9年）に朝鮮王朝樹立480周年を記念して高宗が作らせたものであるが、この時、高宗は自らの肖像も命じて描かせている。著者は、この二つの肖像画を出発点にして、朝鮮王朝における御真（王の肖像画）の機能が静かに変奏しはじめたことを鮮やかに切り取ってみせる。在位中の王が自身の御真を描かせ、同時に王朝の始祖の御真制作

も命じ、さらにはこれらの肖像画が親政開始の前年に描かれたということを考え合わせるとき、高宗が勢道政治を払拭し自らの王権の正統性の確認と強化を狙っていたことがおのずと明らかになってくる。

こうして、静かなゆらぎのなかではじまった「御真」の変容は、油彩画や写真という新しい媒体の導入と同時に西洋式の「肖像画」の概念がもたらされたことにより、さらに二転三転していく。開港に伴い、国家を象徴するものとしての王の肖像が海外諸国から要請されるようになってくると、元来、祭儀の対象物でありかつ王の身体と同一視されるがゆえに、みだりに外部にさらすことがはばかれる存在であった王の姿絵が、国家を象徴する「記号」へと転換し、公共の場へとひきだされ、複製され、流布するようになっていくのである。

ただし、新概念の流入によって伝統絵画や王室文化の価値観にもとづく御真の文脈が一気に消失したわけではない。内政的には、密閉された祭儀空間において王権の正統性を強調し、外交上は列強と肩を並べうる威厳に満ちた専制君主の国家であることを目に見えるかたちで示さなければならないという、両極の間を往復する動態が本書では丹念に描き出されている。

高宗自身はイメージのもつ政治性についてかなり意識的であり、これを積極的に利用しようとし、部分的には成功を収めていることが本書では明らかにされているが、しかしながら彼は結局「王のイメージ」の統括権を護持しきれなかった。高宗の像は、ある時は日本の錦絵の中において、ある時は観光用のはがきの中に、またある時は日本の宮内庁が発行する印刷媒体に反復して映し出された。こうした主導権の喪失とイメージの転落は、そのまま朝鮮が植民地へと転落していく姿にオーバーラップするものである。

朝鮮近代文化史の既存の著述は、宗主国側の俯瞰的視線か、あるいは不当な支配の被害者からの視点かのいずれかで固定的に書かれることが少なくなかった。本書は、王のイメージというキーワードを軸に、近代期における新概念の導入過程を極めて丹念におった好著であるだけでなく、自己と他者の視線が交錯するありさまを複眼的にとらえようと努力している点で意義深い労作であるといえるだろう。